

中学校家庭科と社会資源との協働によるシティズンシップ育成に関する研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2016-06-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加賀, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009581

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻： 共同教科開発学専攻 氏名： 加賀 恵子

論文題目： 中学校家庭科における社会資源との協働によるシティズンシップ育成に関する研究

論文要旨： 本研究の目的は、「持続可能な社会を他者とともに築こうとするシティズンシップを備えた生活者の育成をめざし、中学校家庭科における社会資源との協働によるシティズンシップ育成モデルを提案すること」である。

本研究では、「シティズンシップ」を「生活者の視点から社会の現状を問い直し、よりよい生活をつくるために社会に能動的に働きかけようとする意欲や態度」と定義した。この定義においては、中学校家庭科の範疇で、常に社会に向かって働きかける直接的な行動を求めることは難しく、発達段階も考慮しなければならないことから、直接的な行動でなくても、社会に能動的に働きかけようとする意欲（実践的な意思決定）も育成すべきシティズンシップとした。また、「社会資源」を「教育を目的に使われる各種の施設、制度、機関、知識や技術などの物的資源や情報資源、互惠関係を築くことのできる人的資源を総称したもの」と定義し、さらに、「協働」を「単独ではできない解決すべき共通の課題に対して、2つ以上の人や組織が一緒に、新たなものを創りだすために活動すること」と定義した。

本研究を進めるにあたり、2つの課題を指摘した。第一に、「実践枠組みの必要性」である。家庭科が目指している問題解決力や実践力を育む方向性は、シティズンシップ育成の方向に重なっていたが、その学習内容や学習方法の検討が課題とされていたからである。第二に「社会資源と協働するためのシステム構築の必要性」である。日本においても、地域共同体に根差し、多様な人々が共生し学び合う場所として学校を再構築する取組が展開される一方で、学校教育と社会的活動の接続や協働を実現するための仕組みや制度、そして、その構築や運用などが課題とされていたからである。

第一の課題を受けて、シティズンシップ育成に向けた家庭科教育実践に、問題解決的な学習と社会資源との協働からアプローチした。具体的には、実践的推論プロセスを用いた問題解決的な学習を取り入れた食と環境についての授業や、多様な社会資源との協働なくして成り立たない「赤ちゃんとのふれあい体験」を取り入れた授業を開発し、これらの授業が生徒のシティズンシップ育成に与える影響について実証的に検討した。その結果、実践的推論プロセスを用いた問題解決的な学習や多様な社会資源との協働の有効性が強く示唆され、シティズンシップ育成のための授業の構成原理を抽出することができた。その構

成原理は、以下の様なものである。①学習内容に、消費や環境といった個人や家族、社会の問題が複雑に絡み合う問題を取りあげること ②実生活のリアルな問題の解決といったような題材をつらぬく共通テーマの設定を行うこと（社会貢献や社会への発信など） ③自分の興味・関心を起点とした課題設定や追究活動を含むこと ④他者との協働があること ⑤他者から得られる多角的な情報や評価があること

また、第二の課題を受けて、授業の構成原理や多様な社会資源との協働などの実践枠組みが、題材や社会資源などの固有性を越えて一般性を備えるために、社会資源との協働によるシティズンシップ育成システムを構築して、事例研究を行った。その際、ドイツ・バイエルン州の中等教育学校における社会資源との協働のための接続システムを参考にした。その結果、「接続システムによる研修会」が担った4つの機能が明らかになった。具体的には、①授業開発のための知識を得る場 ②社会資源とつながるための情報を得る場 ③研修会相互の補完の場 ④先輩に学ぶ場、後輩に伝える場である。さらに、これらが機能する「接続システムによる研修会」が循環的に行われることによって、教師のシティズンシップが育成されることや、そうした力を形成した教師によって社会資源との協働による中学校家庭科の質の高い授業が繰り返し実践されることで、生徒のシティズンシップが育成されると推察された。これらのことから、シティズンシップ教育を「地域・学校・家庭などの教育に関わるすべての個人・組織が、子どもを市民に成長させるという責任の下に協働して実施すべき教育（唐木，2008）」とした定義に、「そのことを通して、携わったすべての主体がシティズンシップを育成していくこと」も重要な視点して加えることができた。

最後に、本研究が目的とした「持続可能な社会を他者ととともに築こうとするシティズンシップを備えた生活者の育成をめざし、中学校家庭科における社会資源との協働によるシティズンシップ育成モデル」を構造化して提案した。

今後の課題として、さらなる題材開発や実践の蓄積に加えて、「接続システムによる研修会」を継続的なシステムとして定着させながら、教員のシティズンシップ育成を図っていくことがあげられる。